

日本留学期の周恩来と京都訪問についての一考察

川崎 高志

当時の京都大学について

京都帝国大学は1897（明治30）年、東京帝国大学について、日本で2番目の大学として創設された。文字通り国家の将来を担うエリートを輩出する高等教育機関として出発した。明治末期になると、日露戦争の終結とともに明治政府が追いかけた「富国強兵」が一応達成され、日本は一等国の仲間入りをしたという感情が人びとの間に広がるようになった。国家の求めるものとは異なる個人の目標を求める状況が現れ、大正時代を迎えたのである。政府の高等教育拡充の政策とともに、京大にとっても、この時期は拡充・発展の時代であり、法科は学生の定員が7倍に、理工科は約2倍の定員増となった。

大正時代はまた第1次世界大戦の好景気とその後の不況を経験した時期でもあった。経済規模の拡大とともに、学問としての経済学にも注目が集まるようになる。

京大でも経済学関連の講座はそれまで法科に属していたが、1919（大正8）年4月にまず法科が法学部に変更した後、5月に経済学部が創設された。講座数は経済学6講座、財政学1講座、統計学1講座、の計8講座であっ

た。教員は法学部から異動した教授8名、助教授2名、書記4名のうち3名が法学部と兼任という体制であった。⁽¹⁾創設時の学生定員は100名であった。

河上教授の講義と人気

1908（明治41）年京都帝国大学法科大学講師となり東京から京都に移り住んだ河上は、翌年助教授となり、欧州留学の後1915（大正4）年同大学教授となった。彼は欧州での見聞をもとに研究を進め、15年に『祖国を顧みて』、17年に先述した『貧乏物語』を、18年に『社会問題管見』、19年に個人雑誌『社会問題研究』を相次いで発表した。ベストセラーになった貧乏物語に代表されるように、彼の研究は当時の最先端の学説をもとに、現実の社会問題の解決に積極的に関わっていかうとするものであった。

京大での河上の講義には多くの若者が集まったといわれる。川上の名が知られるにつれ、その警咳に接しようという学生達が、全国から京大を目指して集まって来た。彼の大学での講義には、京大の経済学部や法学部の学生のみではなく、他の学部の学生はもちろん、

京大以外の大学の学生までが、ひそかに教室にもぐりこんで熱心にノートをとっていたという。河上も毎年、講義ノートを新しく書き改め、講義の前日には一切の面会を断って準備に専心するほど、講義内容の充実に全力を傾け、学生達の期待に応えた。⁽²⁾

河上自身は当時の世間の注目について次のように自ら記している。

「もし私がある間、当時の思想界に対し、何らかの貢献をなし得たとするならば、それはマルクス主義というものの存在を宣伝した点に存するであろう。すでに相当数に上っていた官立の大学教授の中で、私のように——たとえ幾多の見当違いをしても、ともかく——マルクス主義の中に真理性を認め、これを擁護しようという立場に立っていた者は、マルクス主義の全盛期が到来するまでは、私のほかに一人もいなかった、と言って差支えあるまい。その間にあつて、私はともかくラッパを吹いて、若い人達の注意をマルクス主義に引き寄せたのである。大学教授ということは、人の信用を買うに有利な条件であった。その上当時の大学教授は、民間の社会主義者とは比較にならぬほど発言の自由を有っていたので、私は意識的にこの地位を利用した。その頃私はまた世間からある程度までその正直さを認められていた。あの男は意識的に嘘を言う男ではないというくらいの信用は、大部分の読者から許されていた。そして文章もまた、普通の大学教授に比べると、上手であり、少なくとも平易であり流暢であった。そんな諸条件が相助けて、私をしてマルクス主義の旗の下に若い人達を呼び集めるためのラッパ手としての役割を十分に発揮せしめたので

ある。私の書いたものは間違いだらけであった、しかしそれは月をさすための指として役立つ。⁽³⁾」

周恩来の入学願書の発見

周恩来がこのような河上の思想や人格に惹かれて、京大を受験してみようという気になつても不思議はない。第2次大戦後、周恩来が用意した京大への入学願書と履歴書が京都郊外の民家から発見された。そのいきさつは次に記されたとおりである。

「京都府京北町（旧山口村）で山林業を営む太田貞次郎氏は、戦時中自家で作っていた米や野菜を、食糧難に苦しむ京都市内の親類、知人に分けていたが、1944年の秋、その中の一軒からお礼に和紙の束をもらった。その中に墨の色もよく、字もしっかりした二枚の書付が目にとまった。それが周恩来と書名のある履歴書と京大の入学願書である。当時の太田市は周恩来の何物たるかを知る由もないが、その端正な筆跡に魅されて、使わずにしまっておいた。戦後長男が中国から復員して、周恩来が中国共産党の要人と知った太田氏は、改めてその二枚の書付を額に入れ、居間に掲げて大切に保管してきた。（略）

1979年来日した周末亡人によって真筆と認められた周恩来の入学願書は、その後太田家から未亡人に送られた。⁽⁴⁾」

二枚の証書から明らかになるのは、周恩来が受験を考えていたのは政治経済科選科であった。京大では、上述のように経済学部の開設は翌19年で、当時河上教授ら経済の講座も法科に所属しており、法科では本科生とはべ

つに選科生も受け入れていた。したがって多くの留学生は選科を志望していたようである。

そしてこの証書を書いた時期が「大正7(1918)年」とあり月日は記入されていない。もし受験しようとしたならば、18年の春の入学試験を受験しようと考えたと思われる。住所は「東京神田区表猿楽町三番地竹村方」となっており、前年来日してまもなく住んだ地域である。但し1918年から書かれた日記には、竹村方に下宿した記述はみられない。⁽⁵⁾

証書には書きこみの跡もあり、月日の記入もされていないことから下書きとみられる。来日まもない17年の後半に周恩来が京都まで旅行したということは考えにくいので、その年の末頃に、先に京大に留学していた南開学校の同窓の友人に預けたものではないかと考えられる。そして、18年の受験は3月の東京高等師範と、7月の第一高等学校に決定したため、結果的に京大受験の願書は提出せず、受験もしなかったのではないだろうか。

京都大学の志望動機は、先述した河上肇の思想に対する強い関心があったのは間違いなからう。また京大は当時日中間の官費留学の指定校になっていたのので、合格すれば友人らと同じく中国政府による官費留学生の資格を持てたことも理由に考えられる。

周恩来と京都

1919年春、新たに開設される南開大学への進学を決意した周恩来は、帰国を前に第一高等学校に合格した友人張鴻詰に漢詩を送った。それは、1917年日本留学に際して自らの決意を歌った「大江歌罷掉頭東」の詩であっ

た。この詩のあとに、「19歳で日本に留学するときにつくったものを、今帰国して祖国の復興を図ることにした。準備を整えて出発を待ち、諸友に別れを告げる」と書き添えて、帰国後の決意を明らかにしたのである。⁽⁶⁾

東京を離れ帰国の途についた周恩来は、途中京都に立寄り、しばしの観光を楽しんだ。

彼が降り立った京都駅は、5年前の1914年に改修された木曾桧造りの壮大な木造建築だった。これは、当時の大正天皇の即位式が15年秋京都御所で行うことが決定され、それに間に合わせるために急遽設計変更され、建てられたものだった。

市内にはまだ馬車や人力車の姿も見られたが、大正初期から自動車の姿も見えるようになった。この当時自家用自動車は大変な高級品で、一流ホテルが少しずつ貴賓の送迎に使うようになったが、18年には京都の自動車総数はわずか66台にしか過ぎなかった。その後景気の回復とともに急速に台数を伸ばし、周恩来が訪れた後の20年には180台、24年には536台と増え、道路上を行き交うようになったのである。

また交通機関には、新たに路面電車も敷かれ、大正元年には市営の4路線が開業したほか、阪神方面や大津方面への路線も開通した。当時の京都は、日本の古都としてすでに海外の観光客が訪れていた。京都商工会議所の統計によれば、京都を訪問した外国人観光客は1918年に6182人、19年には7133を数えている。その多くが、アメリカからの団体客だったようである。中国人の観光客は決して多くなかったが、京都在住の留学生や、阪神地域の華僑や滞在者が春の京都を訪れる機会があっ

ただろう。

周恩来が京都で宿泊した友人の呉翰涛の学籍と住まいの所在については、本部廣哲氏の研究・調査によって明らかになっている。呉は当時、京都第三高等学校に在籍する学生で、住まいは東山一条を西へ入ったところ、現在の京都市左京区の区役所になっている場所にあった、2軒ならびの北側であったと考えられている。⁽⁷⁾

京都にいた南開学校の同窓の友人に関しては、これまで書かれた伝記に幾つかの名前で登場している。

許芥昱『周恩来』では“韓某”という名で登場する。本書執筆の情報提供者の一人として、南開時代の旧友で、1918年には京都で周と同じ家で暮らしたと書かれている。韓夫妻は他の4人の中国政府給付留学生と周恩来の生活費を拠出したとされる。そして、18年の冬、周恩来は南開大学への郷愁を覚え、京大の社会学科にいた韓に手紙を書き、韓からの強い誘いの返事で京都を訪問した。このときの韓からの返事の末尾には、「われわれはみな他国で暮らす異邦人ではないか。互いに助け合ってもよいではないか」と書かれており、周はこの言葉に心を動かされたとある。また、周の河上肇に対する傾倒にも言及し、韓に頼んで河上に紹介してもらおうとしたが、韓は周との間の思想的ギャップが大きくなることを恐れて断った、ともかかされている。⁽⁸⁾

この本ときわめてよくにたエピソードは、ディック・ウィルソン『周恩来』にも書かれており、ここでは筆者が1980年6月に台北でインタビューした人物で“吳達闓”という名前であるとしている。⁽⁹⁾

また金沖及主編『周恩来伝』では、南開の学友“呉翰涛”の名前と滞在の事実のみ挙げられている。⁽¹⁰⁾

周恩来の日本留学中の財源については、彼自身が旅日日記で詳細に貸借表を記している。この表では、来日後の17年から18年10月までに援助を受けた人物名が15人以上記されており、わずか4人だけによる援助ではない。また留学会からも100元以上の援助をうけており、経済的には厳しい留學生活であったが、18年の冬になっても生活が出来なくなった状況はみられない。また18年12月には南開学校の創立者嚴修と校長張伯苓らが二度目の米国訪問の帰路、東京で「新中寄蘆」に立寄り、南開同窓メンバーと親しく歓談している。したがって周恩来がこの時期に急に郷愁を抱いたとは考えにくい。⁽¹¹⁾

このような状況から鑑みて、周恩来が京都を訪問したのは、帰国直前の19年春だけだったと考えるのが妥当と思われる。

周恩来による詩作

周恩来は嵐山、円山公園を数度訪れ、満開の桜と緑鮮やかな山河を目にした感動を4編の漢詩に詠っている。そこでは古都の桜花爛漫の春に対する感動とともに、帰国するに際しての当時の心情が表れている。以下幾つかの側面から検討してみたい。

京都に旅立つ直前の3月上述したように、友人の張鴻浩に送った送別の手紙で、「返国図他興」と、祖国の復興のために身を捧げる事を決意した。そして、4月初め雨に煙る嵐山を観光し、5日に「雨中嵐山」の詩を書い

た。この詩の中で、「一線陽光穿雲出、愈見
姣妍」と雲間から一条の陽光が差している様
をのべ、さらに「模糊中偶然見着一點光明」
と、社会の森羅万象も曖昧だが、その中に突
然一点の光明を見つけた喜びを書き記してい
る。

この「一点光明」が何であるかについては、
幾つかの見解があるが、筆者はこの時点の周
恩来⁽¹³⁾の思いは、朝鮮の独立運動や中国の愛
国運動が盛んになる中、祖国の発展のために帰
国を決意し、その後のマルクス主義者、革命
家となる道へと到る出発点に立った、自らの
覚悟を示しているのではないかと考える。

新時代の革命運動に取り組んでいこうとい
う周恩来の意志は、同日の「雨後嵐山」の詩
中に見て取れる。ここでは「想起那宗教、礼
法、旧文芸、……粉飾の東西、還在那講什
信仰、情感、美観、……的制人学説」と
『新青年』等で主張された新文化運動と同じ
立場で、人を抑圧する封建的旧文化を批判し
ている。さらにそれら旧勢力に対して、「元老、
軍閥、党閥、資本家、……從此後“将
何所持”」と強く非難し、対決の姿勢を明確
にしている。⁽¹⁴⁾

また、4月9日の日付で書かれた「四次遊
圓山公園」でも、前二首と同様に、「想人世
成敗繁枯、都是客観的現象」と流転しやすい
現実社会を冷静に見つめ、「何曾開芳草春花、
自然的美、無碍着的心」と美しい自然の真理
を愛でながら、揺るがぬ自身の心情を明らか
にしている。⁽¹⁵⁾

京都の人々の友誼

1979年4月、亡き夫の遺志を継いで日本
を初訪問した鄧穎超女史は、京都を訪れ、周
恩来が京都で詠んだ雨中嵐山の詩碑の除幕式
に臨んだ。この碑は京都の日中友好関係団
体が日中平和友好条約の締結を記念して建
立された。前年に鄧小平氏の京都訪問を機
に建設の気運が起こり、年頭から日中友好
詩碑建設委員会が発足し、準備をすすめて
きた。雨中嵐山の詩文は廖承志氏の揮毫で
碑は周恩来が二度訪れた、嵐山の亀山公
園に設置され、4月16日鄧穎超女史み
ずからが除幕した。当日は周恩来が訪
れた六〇年前と同様瀟々たる雨が滴る中
進められた。

詩碑の副碑には、「一九七八年十月 日
中平和友好条約締結を記念し京都人の子
々孫々までの友好の心を現す為、ゆかり
の深い此の地に、偉大なる実力者周恩
来総理の詩碑を建立する」と記されてい
る。

除幕式で挨拶に立った当時の林田悠紀
夫知事は「ちょうど六〇年前、周恩来
総理がこの詩を吟じられた同じ場所で、
同じ季節に、ほかならぬ鄧穎超夫人
のお手によって碑が除幕されますこと
に、私たち京都府民は格別の感慨を覚
えるものでございます」と鄧女史の来
訪を喜び、「周恩来総理が、そのきわめ
て多忙であられた生涯のうち、青春の
日の一日をこの嵐山に遊ばれ、この風
景を愛でられたことを、私たちは光榮
とするものでございませぬ。私たちは、
周恩来総理に対する敬愛の心を表すと
ともに、日中両国の末永き平和友好を
願って、ここに記念の碑を建立いたし
ました」と、詩碑の建設に込めた京都
の人々の、

中国への友誼の思いを語った。⁽¹⁶⁾

建立委員会が願ったように、中国各界の多数の代表団が相次いでこの詩碑を参観に訪れ、79年9月には当時の谷牧副総理が、80年4月の一周年祝賀には当時の余秋里副総理が参列している。文字通り日中友好を象徴する京都の名勝地となっている。

* 本稿は、創価大学と中国南開大学周恩来研究センターによる共同研究、『日本留学時代の周恩来』で筆者が担当した、第7章「周恩来と京都・神戸」を加筆したものである。

【注】

- (1) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』（部局史編Ⅰ）、p383～5、京都大学後援会、1997年。
- (2) 西川勉編『アルバム評伝河上肇』、p38、新評論社、1980年。
- (3) 河上肇『自叙伝Ⅰ』、p181、岩波書店、1969年版。
- (4) 前掲『河上肇』p40。
- (5) 「周恩来旅日日記」『周恩来早期文集』（上巻）p306～404、中央文献出版社・南開大学出版社、1998年。
- (6) 「臨別書贈張鴻浩」、同上、p411。
- (7) 「周恩来総理与京都」『中外学者再論周恩来』p30～34、中央文献出版社、1999年。
- (8) 許芥昱『周恩来』（日訳本）、p25～28、刀江書院、1972年。
- (9) ディック・ウィルソン『周恩来』（日訳本）、p362、時事通信社、1977年。
- (10) 金沖及主編『周恩来伝』、p36、中央文献出版社、1989年。
- (11) 前掲『周恩来早期文集』（上巻）、p405～8。
- (12) 前掲『周恩来伝』、p33。
- (13) 「雨中嵐山」『周恩来早期文集』（上巻）、p413。
- (14) 「雨后嵐山」同上、p414。
- (15) 「四次遊圓山公園」同上、p415。
- (16) 『夕刊京都』1979年4月16日。